「つまずきを超えて」
マタイによる福音書 13 章 53－58 節

　イエスさまが故郷のナザレにお戻りになった時のことです。イエスさまは、ガリラヤの他の村々でしたのと同じように、ナザレでも安息日の会堂で力強く教えられました。そして多くの人々は、イエスさまの教えを聞いて「驚いた」と言うのです。このことは、これまでの至る所で、イエスさまの御言葉を聞き、御業を見た人々に起ったのと同じ反応です。その驚きの中で、主イエス・キリストに従って行く者たちが生まれたのです。イエスさまへの驚きは、信仰へと、あるいは少なくとも信仰のきっかけへと実を結んでいきました。
　しかし、故郷の人々においては、そういうことが起こりませんでした。彼らは、イエスさまの言葉と業に触れていながら、人としてのイエスのみを理解し、捉えようとしました。それゆえ彼らは、自分が理解出来る範囲の人間イエスの姿と、まことの神の権威を持って語られるイエス・キリストとのギャップに躓いたのです。自分たちはイエスのことを知っているという思いが、神の子としてのキリストの姿に躓かせたのです。ここで「つまずいた」と言われている言葉は、「拒絶した」とも訳せる言葉です。つまり、自分の知っている範囲でイエスを把握しようとした人々は、まことの神の子であるイエス・キリストを受け入れることが出来なかったのです。
　もしイエスさまの言葉を人間の言葉としか理解せず、イエスさまを大工のせがれとしか理解せず、イエスさまの御業を人間の業としか理解しないのであれば、神の業も、神の業として見ることはできません。神の奇跡がそこで確かに起こっているのに、それを認められないのです。私たちの不信仰によって、それが見過ごされてしまう。イエス・キリストの御業は、信仰のある所で私たちにとっての救いの出来事となるものです。私たちも聖書の言葉を、ただ昔の人の立派な教えだとか、自分の身の回りに起こる神さまの導きを、偶然とか、現実的な力の結果とだけ考えているのなら、神の奇跡を見ることはできないでしょう。

　故郷の人々は、その不信仰からイエスさまにつまずきました。しかし、イエスさまは、この不信仰の故郷に負けることはありませんでした。なぜそう言えるのか。その理由の一つは、母マリアが、やがて最初の教会の中でも際立った信仰者となっていったからです。また、イエスさまの兄妹たちも教会の中心的人物になっていきました。おそらく、今日の出来事があった時点では、彼らも故郷の人々と五十歩百歩でした。しかし、キリストの十字架と復活の後、聖霊の助けによって、彼らは自分の兄を、救い主、神の御子として見るように立ちあげられたのです。このように、主イエス・キリストは、不信仰者をも信仰者へと変えてくださるお方なのです。
　どんな人よりも貧しく、飼い葉桶にお生まれになったイエスさまは、大工の息子と言われ、マリアの子と蔑まれ、そして十字架につけらました。その十字架において、人々はイエスさまを侮辱し、あざけってこう言うのです。「他人を救っても、自分を救うことができない。イ

スラエルの王なら十字架から降りてこい。神の力を我々に見せつけてみろ！！そうしたら信じてやろう！」と。私たちは、こんな時ですら、神さまの御業を拒絶してしまうのです。自分の注文通りの奇跡を見せてくれたら信じてもいい。でも、そうでないと気に入らない。認めない。けれども主イエス・キリストは、そんな私たちの逃れられない罪を、私たちが本来払わなければならない代償を、ご自身の上に引き受けてくださったのです。キリストの十字架によって、私たちを罪と死から贖ってくださったのです。

聖書が私たちに語り告げることは、馬小屋で生まれ、大工の息子として生活し、そして神の国を宣教し、人を愛し抜き、十字架であざけられて生涯を閉じたこの方こそが、神の御子であり、私たちの救い主であるということです。徹底して低みを生きぬいたこの方にこそ、神のまことの力が隠されている。この主イエス・キリストの低い姿こそ、神の謙遜、神の真実の愛の現れである。この方を救い主として信じ従うのか、それともその主イエス・キリストにつまずくのか、そのことが問いかけられているのです。

イエスさまがお生まれになった時、ベツレヘムで幼子を礼拝した東方の博士たちは、何の権威もない幼子にひれ伏しました。謙遜なる思いで神の御前に進み出たのです。そして今までとは全く別の道を歩み出しました。私たちもアドベントのこの時、自分の基準や物差しに固執した傲慢さを悔い改め、どこまでも低みに立たれた御子イエス・キリストを、心に迎える備えをしていきたいと願います。